

緩やかな大学間連携による学びの場の創出（2）

～全国まちづくりカレッジを事例として～

古川 尚幸

- I はじめに
- II 全国まちづくりカレッジの概要
- III 全国まちづくりカレッジ2021 in 香川
- IV 全国まちづくりカレッジ2022 in 香川
- V 参加者アンケートの結果からの考察
- VI おわりに

I はじめに

新型コロナウイルスが猛威を振るうなか、その影響は大きな制約を教育現場に課してきた。この思いもよらぬ制約を受けながら、それでも教育現場では、情報通信技術を駆使しながら、停滞することなく教育活動を継続してきたが、2023年5月8日から新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが5類感染症になったことを受け、教育現場においても、また我々が取り組んできた地域活性化やまちづくりの現場においても、徐々にコロナ禍以前の状況に戻りつつある。しかし、コロナ禍においても、わが国における少子高齢化や人口減少は着実に進行しており、社会が大学に求める役割として、従来の「教育」や「研究」のみならず、「地域貢献」が強く求められる状況に大きく変わりはない。

香川大学では、2005年に直島（香川県直島町）でカフェ運営を中心とした様々な地域活動を展開する香川大学直島地域活性化プロジェクトが設立されて以来、コロナ禍のなかで様々な制約を受けながらも、香川県内の様々な地域や社会課題に取り組む多くの学生プロジェクトが継続して活動している。また、例えば、舛井（2023）でも見られるように、学生が主体となり地域課題に取り組む学生プロジェクトは全国各地で活動を継続しており、コロナ禍であっても、その動きが止まることはなかった。

全国各地の大学で展開されている学生が主体となり地域課題に取り組む学生プロジェクトに関して、大学の枠を越えた緩やかな連携のひとつとして、古川（2022）では、「全国まちづくりカレッジ」を取り上げ、その詳細について述べた。このなかで、遠隔会議システムを用いることで、大規模な学生たちの「学びの場」を創出できることを示すとともに、地域で活動している学生たちが一堂に会し、大学の枠を越えて、互いの活動について知り、活動のなかで感じている課題について語り合う「学びの場」が重要であることについて明らかにした。

そこで本稿では、引き続き、学生たちによる「学びの場」としての「全国まちづくりカレッジ」を取り上げ、コロナ禍のなかで大きな制約を受けながら2022年度に開催した大会を中心に、その概要について述べる。また、コロナ禍で遠隔会議システムを用いての開催を余儀なくされた2021年度の大会と、対面形式で2022年度に開催した大会のなかでそれぞれ実施した、参加者を対象としたアンケート調査から、比較検

討した結果について述べる。さらに、この比較検討した結果から、コロナ禍であっても、様々な地域課題に取り組む学生プロジェクトに携わる大学生にとって、全国まちづくりカレッジが「学びの場」として重要であることを明らかにする。

Ⅱ 全国まちづくりカレッジの概要

ここでは、本論文の対象である全国まちづくりカレッジ（以下、まちカレと略する）について、その目的とこれまでの経緯を改めて概観しておきたい。

すでに古川（2022）でも述べたように、名古屋学院大学 水野晶夫教授によると、まちカレとは「大学と市町村行政や商店街等との協働により、大学教育と地域社会を連動させ、まちづくり活動の学習や実践に結び付けようとしている大学関係者（学生や教職員）が集い、事例報告・ワークショップ・交流イベントなどのプログラムからなる全国規模での学生主体のフォーラム」のことである。全国でまちづくりに携わっている学生プロジェクトが一堂に会し、それぞれの地域で展開している地域活動に関する報告や、地域活動に関連するテーマに基づいた議論を通じて、地域活動の手法を学ぶだけでなく、参加している学生たちの地域活動への理解やモチベーションの維持向上を目的としている。

現在のまちカレの前身である「全国まちラボ大集合」が2002年に関西学院大学で開催され、2003年からは全国まちづくりカレッジに名称を改めて、現在まで継続して開催されている（表1）。

表1 これまでの全国まちづくりカレッジ開催実績

	開催年	開催月	開催校	開催場所	イベント名称
第1回	2002年	6月	関西学院大学	兵庫県三田市	全国まちラボ大集合
第2回	2003年	3月	岐阜経済大学	岐阜県大垣市	まちづくりカレッジ in 大垣
第3回	2004年	3月	佐賀大学	佐賀県佐賀市	まちづくりカレッジ in 佐賀
第4回	2005年	3月	沖縄大学	沖縄県那覇市	まちづくりカレッジ in 那覇
第5回		8月	名古屋学院大学	愛知県瀬戸市	EXPOまちづくりカレッジ まちづくりカレッジ in 瀬戸
第6回	2006年	3月	関西学院大学	兵庫県三田市	全国まちづくりカレッジ in 三田
第7回	2007年	3月	佐賀大学	佐賀県佐賀市	全国まちづくりカレッジ in 佐賀
第8回		11月	岐阜経済大学	岐阜県大垣市	全国まちづくりカレッジ in 大垣
第9回	2008年	11月	大阪人間科学大学	大阪府摂津市	全国まちづくりカレッジ in 摂津
第10回	2009年	11月	名古屋学院大学	愛知県名古屋市	全国まちづくりカレッジ in 名古屋
第11回	2010年	11月	香川大学	香川県高松市および直島町	全国まちづくりカレッジ in 直島
第12回	2011年	10月	京都文教大学	京都府宇治市	全国まちづくりカレッジ in 宇治
第13回	2012年	3月	沖縄大学	沖縄県那覇市	全国まちづくりカレッジ in 沖縄
第14回		11月	皇學館大学	三重県伊勢市	全国まちづくりカレッジ in 伊勢
第15回	2013年	3月	松本大学	長野県松本市	全国まちづくりカレッジ in 松本
第16回		10月	明治学院大学	東京都江東区	全国まちづくりカレッジ in 東京
第17回	2014年	9月	星城大学	愛知県東海市	全国まちづくりカレッジ in 東海
第18回	2015年	2月	香川大学	香川県高松市および直島町	全国まちづくりカレッジ in 香川
第19回		9月	岐阜経済大学	岐阜県大垣市	全国まちづくりカレッジ in 大垣
第20回	2016年	10月	名古屋学院大学	愛知県名古屋市	全国まちづくりカレッジ in 名古屋
第21回	2017年	9月	京都文教大学	京都府宇治市	全国まちづくりカレッジ in 宇治
第22回	2018年	2月	皇學館大学	三重県伊勢市	全国まちづくりカレッジ in 伊勢
第23回		8月	國學院大學北海道短期大学部	北海道滝川市	全国まちづくりカレッジ in 空知
第24回	2019年	8月	旭川大学	北海道旭川市	全国まちづくりカレッジ in 旭川
第25回	2021年	2月	西南学院大学	リモート	全国まちづくりカレッジ in 福岡
第26回		8月	香川大学	リモート	全国まちづくりカレッジ in 香川
第27回	2022年	9月	香川大学	香川県高松市	全国まちづくりカレッジ in 香川

まちカレの特徴は、事務局を持たない緩やかな大学間連携による組織であり、参加するための条件や資格はなく、地域で活動する学生団体に対して広く開かれた組織である。開催校の決定にあたっては、参加大学の持ち回りで、参加大学の教職員の合意により行われる。その運営についても、開催日程やプログラムは、各開催校の学生たちを中心に構成された実行委員会によるものである。

Ⅲ 全国まちづくりカレッジ2021 in 香川

ここでは、2021年度に香川大学が開催校となり開催したまちカレについて、その結果について簡単に振り返っておきたい。

香川大学が初めてまちカレに正式参加した2009年に開催された第10回大会から2019年8月に開催された第24回大会に至るまでは、対面形式で2日間に渡り開催されることが通常であり、1日目にそれぞれの学生団体からの活動報告を、2日目に開催地でのフィールドワークとそのまとめを行う形式で開催されてきた。しかし、わが国における新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、2021年2月に西南学院大学が開催校となった第25回大会ならびに2021年8月に香川大学が開催校となった第26回大会では、遠隔会議システムを用いた形式（以下、リモート形式とする）での開催に変更せざるを得ない状況となった。

第26回大会の開催では、実行委員会のなかで「リモートであっても、通常通りのまちカレを開催することが可能であること」、「これからの開催校の参考となるように、まちカレの一般的なスタイルを示すこと」の2点を目標とする共通認識のもと、事前準備から当日運営に至るまでこれらの目標を意識して取り組むこととした。

大会当日は、コロナ禍であるにもかかわらず、リモート形式での開催ということもあり、北は北海道から、南は福岡県まで、全国から13大学21団体、計260名を越える学生や教職員が参加して開催することができた。すべてのプログラムがリモート形式ではあったが、コロナ禍以前のまちカレと同じく、1日目にはそれぞれの学生団体からの活動報告を、2日目には、フィールドワークの代わりとして、地域活動に関連するテーマに基づいたグループディスカッションを実施した。

新型コロナウイルスの影響により、対面形式での活動が不可能となり、大きく制約を受けたまちカレではあったが、開催校としては、前述した2つの目標を達成できたと自己評価している。

Ⅳ 全国まちづくりカレッジ2022 in 香川

ここでは、2022年度に香川大学が開催校となり開催した第27回大会となるまちカレについて、その詳細を述べておきたい。

前述のとおり、2021年度に開催した第26回大会では、その目標である「リモートであっても、通常通りのまちカレを開催することが可能であること」、「これからの開催校の参考となるように、まちカレの一般的なスタイルを示すこと」の2点を目標とした。しかし、2022年度に第27回大会を開催するにあたり、前回の対面形式で開催した第24回大会からすでに3年が経過して、対面形式でのまちカレを経験した学生が少なく、このことは香川大学のみならず、まちカレ参加大学ならびに参加団体に共通した問題であった。

そこで、前回の大会の目標のうちのひとつを「これからの開催校の参考となるように、まちカレの一般的なスタイルを示すこと」としていた香川大学では、引き続き、第27回大会においても開催校となり、この目標を達成するために香川大学において対面形式で開催することを希望した。2年連続で同じ大学が開催校となることは、これまでのまちカレの約20年あまりの歴史のなかでは異例ではあるが、参加大学から理解を得て、再び開催校となるに至った。

この第27回大会では、香川大学が開催校となり、2022年9月23日（金）・24日（土）の2日間に渡り開催した。香川大学が開催校を務めるまちカレは、表1に示したように2010年度、2014年度、2021年度に続き4回目となった。

2022年度において、わが国における新型コロナウイルスの影響が前年に比べてやや小さくなったとは言え、会場となった香川大学経済学部においても、教室定員を従来の半分程度に設定し、授業は対面形式とリモート形式を併用して行うといった、大きく制限された状況にあった。当然のことながら、対面形式での開催を目指すまちカレも、会場となる香川大学における制限と同じ条件で開催する必要があった。

新型コロナウイルス感染拡大により大きな制約を受けることにはなったが、今回のまちカレ開催では、開催校の担当教員として実行委員会に、「温故知新」をコンセプトとして、コロナ禍以前のまちカレを継承しつつ、コロナ禍により大きな制約を受けながらも実行可能な「新たなまちカレのスタイルを示そう！」というテーマを課題として与え、まちカレの開催に向けて準備を始めた。

(1) 実行委員会

今回のまちカレでは、2021年度から実行副委員長を2名増員して5名とし、実行委員長1名と実行副委員長5名のもと、実行委員として香川大学の各プロジェクトからリーダーと副リーダーを招集して実行委員会を構成した。各プロジェクトから実行委員を招集することで、香川大学の学生プロジェクトが一丸となり、当事者意識をもって企画・運営にあたることや、特定の実行委員に負担が偏ることを避け、それぞれの負担の軽減を図った。さらに、今回のまちカレでは、2日目に開催するフィールドワークを複数の地域で実施したため、これらの地域で活動しているプロジェクトから実行副委員長を置くこととした。

表2 全国まちづくりカレッジ in 香川 参加大学（2022年9月開催）

所在地	大学名	団体名
北海道	國學院大學北海道短期大学部	舛井ゼミ
	東海大学	地域連携プロジェクト SAN+
愛知県	名古屋学院大学	マイルポストクラブ
岐阜県	岐阜協立大学	マイスター倶楽部
三重県	皇學館大学	地域社会研究会
京都府	龍谷大学	服部ゼミ キヌガサタケレシピ
		服部ゼミ 屋台カフェ・プロジェクト
	京都文教大学	KASANE0
		地域連携学生プロジェクト KminK 商店街活性化隊 しあわせ工房 CanVas
香川県	香川大学	直島地域活性化プロジェクト
		小豆島プロジェクト
		Bonsai☆Girls Project
		KAGAWA Maker
		さかいで沙弥島プロジェクト
		学生ESDプロジェクト SteeeP
		Kitahama Lab
		佛生山らぼプロジェクト
		OGIJIMAプロジェクト ここちから
		たどつまちLabo
		綾川まちづくりプロジェクト With
福岡県	西南学院大学	MATI TO MANY

（2）参加大学および参加団体

まちカレの参加大学や参加団体については、その緩やかな大学間連携である性質上、毎回、その数に増減があるが、今回のまちカレでは、対面形式での開催であったこともあり、前回からやや参加大学は減少したものの、北は北海道から、南は福岡県まで、全国から9大学22団体、計300名を越える学生や教職員が参加して開催することができた（表2）。

（3）活動報告

今回のまちカレは対面形式での開催であったため、新型コロナウイルスの影響により、開催にあたっては大きな制約を受けることとなった。会場となった香川大学経済学部では、教室の利用にあたって、教室定員を従来の半分程度に設定したため、まちカレも同様の基準で開催した。

従来、1日目の活動報告では、ひとつの教室に参加者が集合して、それぞれ活動報告を行ってきたが、今回は、教室定員を半分としたうえで、大教室（DRI棟 11教室・21教室・31教室）を3教室使用して、それぞれで活動報告を行うこととした。各大学の活動報告に割り当てた時間は8分間、それぞれの活動報告に対する質疑応答を7分間とし、各教室で司会者およびタイムキーパーを置いて実施した（表3）。

表3 タイムテーブル（1日目）

日付	時間	内容	場所	
9月23日 (金)	12:30~13:00	受付	DRI棟 1階入口	
	13:00~14:30	開会式ならびにゲストご講演	DRI棟 11教室・21教室・31教室	
	14:30~14:45	活動報告	香川大学 直島地域活性化プロジェクト	11教室
			香川大学 Bonsai☆Girls Project	21教室
			香川大学 KAGAWA Maker	31教室
	14:45~15:00	活動報告	岐阜協立大学 マイスター倶楽部	11教室
			京都文教大学 商店街活性化隊 しあわせ工房 CanVas	21教室
			國學院大學北海道短期大学部 舛井ゼミ	31教室
	15:00~15:15	活動報告	京都文教大学 地域連携学生プロジェクト KminK	11教室
			龍谷大学 服部ゼミ キヌガサタケレシピ	21教室
			東海大学 地域連携プロジェクト SAN+	31教室
	15:15~15:25	活動報告	休憩	
	15:25~15:40	活動報告	香川大学 学生ESDプロジェクト SteeP	11教室
			香川大学 さかいで沙弥島プロジェクト	21教室
			香川大学 Kitahama Lab	31教室
	15:40~15:55	活動報告	西南学院大学 MATI TO MANY	11教室
			名古屋学院大学 マイルポストクラブ	21教室
			京都文教大学 KASANEO	31教室
	15:55~16:10	活動報告	龍谷大学 服部ゼミ 屋台カフェ・プロジェクト	11教室
			香川大学 小豆島プロジェクト	21教室
香川大学 佛生山らぼプロジェクト			31教室	
16:10~16:20	活動報告	休憩		
16:20~16:35	活動報告	香川大学 OGIJIMAプロジェクト ここちから	21教室	
		香川大学 たどつまちLabo	31教室	
16:35~17:00	活動報告	休憩&移動		
17:00~18:20	活動報告	ディスカッション	DRI棟 各教室	
18:20~18:30	活動報告	休憩&移動		
18:30~19:10	活動報告	名刺交換会および2日目の説明	DRI棟 11教室・21教室・31教室	

*各団体の活動報告：活動報告（8分）、質疑応答（7分）

教室定員の管理を目的として、活動報告の際の教室移動を避けるために、予め参加者にはそれぞれが入室する教室番号を知らせて、各教室で教室定員を超えることがないように配慮した。また、参加大学や参加団体ができる限り多くの活動報告を聞くことができるように、特定の教室に同じ団体の学生が集中しないよう調整した。参加者が活動報告を聞いてみたい教室に自由に移動できないことで、今大会への参加に対して不満を持つことも想定していたが、対面形式での開催と感染拡大防止を最優先に、このような感染対策を取った。一方、それぞれの参加団体には、活動報告に関する動画の作成を依頼し、それらを取りまとめて動画サイトに掲載することで、参加者がすべての活動報告を聞くことができるよう工夫した。

(4) グループディスカッション

これまで対面形式で開催していたまちカレでは、参加大学や参加団体からの活動報告の終了後、実行委員会が設定したテーマに基づき、グループディスカッションの時間を設けることが多く見られたが、今回も対面形式での開催であったため、コロナ禍以前の大会に倣い、実行委員会が設定した9つのテーマに分かれて実施した（表4）。

表4 ディスカッションテーマ

番号	テーマ	グループ数
1	効果的な広報	6
2	モチベーション維持・向上	6
3	限られた時間の使い方	6
4	プロジェクト内の情報共有	6
5	合意形成	4
6	アドバイスの仕方の工夫	4
7	地域との関わり方の工夫	6
8	落ち込んだときの対処法	4
9	チーム全員が主体的に行動する方法	6

このグループディスカッションでも、活動報告の際に3教室に分けて実施したことと同じ理由で、活動報告よりもさらに細かく9教室、計48グループに分けて実施した。平時のまちカレであれば、各グループでまとめた内容を各テーマで共有し、さらに参加者全体に報告する形式が取られる場合が多いが、今回は、ひとつの教室に参加者が集まることが困難であったため、各テーマでの共有のみに止めた。各グループでの議論については、大会終了後に、実行委員会が中心となって作成した報告書に掲載することで、参加者に対する共有とした。

前回の大会において、当時の実行委員会が設定したグループディスカッションのテーマは、「魅力のある組織づくり」、「仕事の割り振り方」、「ミーティングの進め方」、「効果的な広報の仕方」、「モチベーションの維持・向上」、「限られた時間の使い方」、「リモートの活用法」の7テーマであったが、今回の大会で実行委員会が設定したテーマのうち、「効果的な広報」、「モチベーションの維持・向上」、「限られた時間の使い方」は、前回の大会と同一テーマであった。さらに、「プロジェクト内の情報共有」、「合意形成」、「チーム全員が主体的に行動する方法」など、前回の大会と同様に、組織マネジメントに関するテーマも見受けられた。このことから、これらのテーマは、学生たちが地域で活動するなかで、いつも課題となるテーマであることがうかがえる。また、前回の大会では当時の実行委員会がテーマとして設定していなかったが、今回の大会で実行委員会が設定したテーマとして、「アドバイスの仕方の工夫」、「地域との関

わり方の工夫」などのテーマが新たに加わった。これらのテーマは、参加大学や参加団体の地域での活動が徐々に対面で再開したことにとともに、新たに学生たちが課題と感じているテーマであることがうかがえる。一方、前回の大会では「リモートの活用法」がテーマとして挙げられたが、今回の大会では、実行委員会からは挙げられなかった。このことは、コロナ禍を通じて、学生たちのリモートに関するスキルが向上したため、地域での活動のなかで、学生たちにとってリモートの活用が解決すべき課題ではなくなったことをうかがうことができる。

なお、今回のグループディスカッションの結果については、『第27回全国まちづくりカレッジ2022 in 香川報告書』に詳細を記載されているため、ここでは省略する。

（5）フィールドワーク

今回の大会では、従来のまちカレと同様に、2日目にフィールドワークを実施した。2010年度と2014年度に香川大学で開催したまちカレでは、フィールドワークの実施場所として、いずれも直島で実施したが、今回の大会では、香川大学からの移動時間を考慮して、高松市内ならびに坂出市内において実施することとした（表5）。

表5 タイムテーブル（2日目）

日付	時間	内容	場所
9月24日 (土)	フィールドワーク		
	各集合時間 ～13:00	香川大学 Bonsai☆Girls Projectによる企画	高松市鬼無地区
		香川大学 KAGAWA Makerによる企画	高松市商店街
		香川大学 学生ESDプロジェクト SteePによる企画	高松市商店街
		香川大学 Kitahama Labによる企画	高松市北浜地区
		香川大学 佛生山らぼプロジェクトによる企画	高松市仏生山地区
		香川大学 さかいで沙弥島プロジェクトによる企画	坂出市商店街
	13:00～14:20	フィールドワークまとめ・報告	DRI棟 各教室
	14:20～14:30	休憩&移動	
17:00～18:20	閉会式	DRI棟 11教室・21教室・31教室	

今回のフィールドワークでは、高松市ならびに坂出市を中心に活動している6プロジェクトが、それぞれテーマ設定から企画、当日の運営まで、責任をもって実施することとした（表6）。

表6 フィールドワークテーマ

テーマ	担当プロジェクト	場所
盆栽の新たな魅力を発見する	香川大学 Bonsai☆Girls Project	高松市鬼無地区
菓子木型や和三盆のPRを考える	香川大学 KAGAWA Maker	高松市商店街
まちなか探検！SDGs探し	香川大学 学生ESDプロジェクト	高松市商店街
北浜地区の魅力発見	香川大学 Kitahama Lab	高松市北浜地区
ふもとBINGOでまちの新たな魅力発見	香川大学 佛生山らぼプロジェクト	高松市仏生山地区
まちの未利用資源の活用方法	香川大学 さかいで沙弥島プロジェクト	坂出市商店街

なお、今回のフィールドワークの結果についても、『第27回全国まちづくりカレッジ2022 in 香川報告書』に詳細を記載されているため、ここでは省略する。

(6) 報告書の作成

全国まちづくりカレッジ in 香川の終了後、実行委員会が中心となり、A4版カラー全110ページの報告書を作成した（写真1）。この報告書には、各団体による活動報告の要約と使用したスライド、グループディスカッションの各グループによる議論のまとめ、フィールドワークのまとめ、参加者アンケートなどを掲載した。この要約やまとめについては、実行委員会を中心に、開催校である香川大学生が責任を持って作成した。完成した報告書については、まちカレ参加者全員に郵送により配布した。



写真1 学生により作成されたまちカレ報告書

報告書の編集作業を通じて、開催校である香川大学生は、まちカレでの議論を再確認する機会となり、また、報告書を受け取った参加者にとっては、まちカレからのフィードバックを得る機会となった。

V 参加者アンケートの結果からの考察

今回のまちカレでは、2日間に渡るすべてのプログラム終了後に、参加者を対象としたアンケート調査を実施した。Googleアンケートフォームを利用した今回のアンケート調査では、2日目に出席していた参加者290名のうち272名から回答が得られ、回収率は93.8%であった。以下、回答者の属性について述べておく。

性別については、男性が30.5% (83名)、女性が69.5% (189名) であり、前回のまちカレ終了後のアンケート調査においても同様の結果が得られた。

学年については、1年生が31.6% (86名)、2年生が38.2% (104名)、3年生が24.3% (66名)、4年生が4% (11名) であった。本来、それぞれの団体で3年生は活動の中心であるが、夏季休業期間に開催したこともあり、インターンシップにより出席できない場合が多いと考えられる。

大学での専攻について、大きく文系と理系に分けた場合、文系が84.9% (231名)、理系が11% (30名) であり、前回の調査とほぼ同じ割合で、文系学生の割合が高い。この点もまちカレの特徴のひとつである。

大学入学前のまちづくり体験について、高校生の時からまちづくりに携わっていた学生が11% (30名)、携わっていなかった学生が88.6% (241名) であり、大学入学後に初めてまちづくりに携わった学生の割合が高い。この点についても、前回の調査とほぼ同じ割合であった。

大学生生活のなかで所属している学生団体（部活動やサークル活動を除く）の数について、1つの団体に所属している学生が79% (215名)、2つの団体に所属している学生が16.2% (44名) であり、この点についても、前回の調査と同じ傾向にある。

プロジェクト活動と単位の関係について、活動することで単位を取得できると回答した学生が54.4% (148名) であり、前回の調査の36% (78名) から増加している。この件については、各大学の状況を詳細に確認してから増加傾向にあるか判断する必要がある。

ふだんの大学生生活のなかでの「経済的なゆとり」と「時間的なゆとり」の有無についての質問では、経済的なゆとりがある学生が63.6% (173名)、ゆとりがない学生が36.4% (99名) であった。また、時間的

なゆとりについては、ゆとりがある学生が53.3%（145名）、ゆとりがない学生が46.3%（126名）であった。前回の調査では、時間的なゆとりがある学生が64%（139名）、ゆとりがない学生が36%（78名）であったことから、プロジェクト活動に取り組んでいる学生の多数は、経済的にも時間的にも比較的ゆとりがある学生が多いが、前回の調査に比べて、時間的なゆとりがない学生が若干増加している。

大学卒業後の進路について、民間企業への就職を希望している学生が44.5%（121名）、行政機関への就職を希望している学生が23.5%（64名）、その他として進学や留学を希望する学生も見受けられた。また、回答者には1年生も含まれていることから、22.1%（60名）の学生が進路は未定であった。

つぎに、学生団体に入ったキッカケについての質問（複数回答可）では、「大学生になって何か挑戦してみたくなったから」が129名（47.4%）、「活動テーマに興味があったから」が105名（38.6%）、「まちづくりに興味があったから」が101名（37.1%）という結果が得られた（図1）。

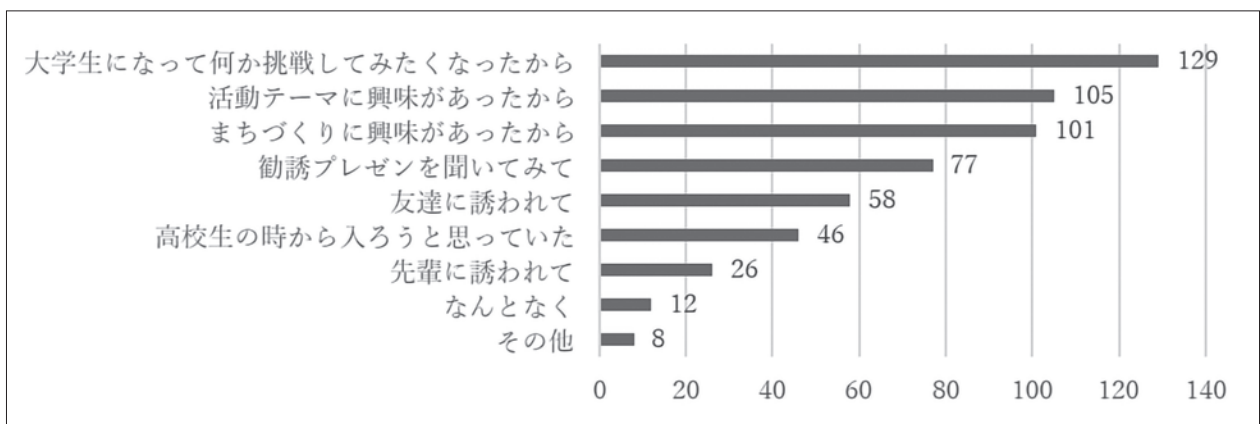


図1 学生団体に入ったキッカケ

前回の調査においても、「大学生になって何か挑戦してみたくなったから」が回答者217名のうち101名（46.5%）、「活動テーマに興味があったから」が76名（35%）、「まちづくりに興味があったから」が77名（35%）と、ほぼ同様の並び順の結果が得られている。

さらに、学生団体に入った目的についての質問（複数回答可）では、「楽しそうだったから」が158名（58.1%）、「まちづくりについて学びたかったから」と「就職活動に有利だから」が107名（39.3%）で続く（図2）。

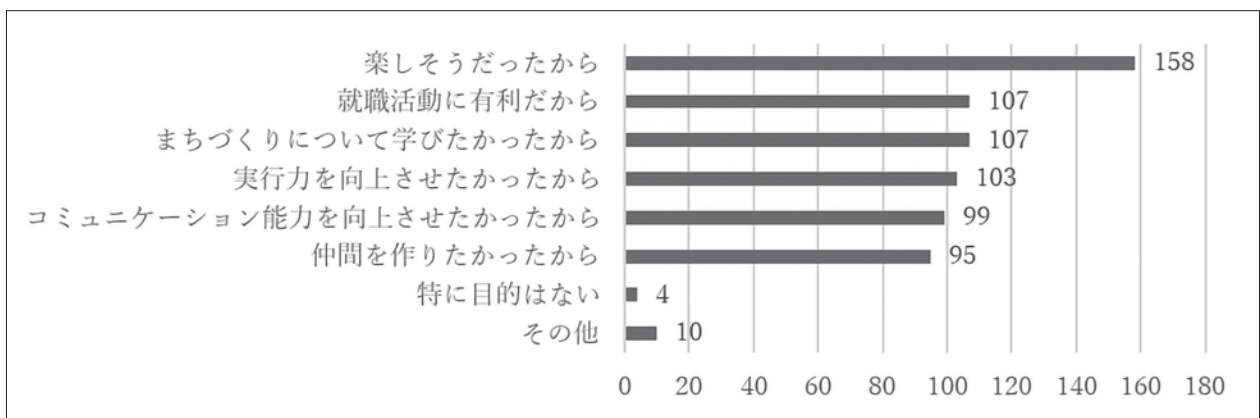


図2 学生団体に入った目的

前回の調査では、回答者217名のうち59名（27.2%）であった「就職活動に有利だから」が約10%程度増加し、前回の調査では72名（33.2%）と3番目に多い回答であった「コミュニケーション能力を向上させたから」は、今回の調査では99名（36.4%）と、割合は変わらないがやや順位を落としている。

また、学生団体に入ったことで成長につながったかの質問では、「成長できたと思う」が32.4%（88名）、「やや成長できたと思う」が52.6%（143名）であり、85%の学生が成長につながったと回答している結果となった（図3）。前回の調査では、「成長できたと思う」が18%（40名）、「やや成長できたと思う」が53%（116名）であり、71%の学生が成長につながったと回答していた。直近では増加しているが、この件については、さらに継続的に調査してから結論を出す必要がある。

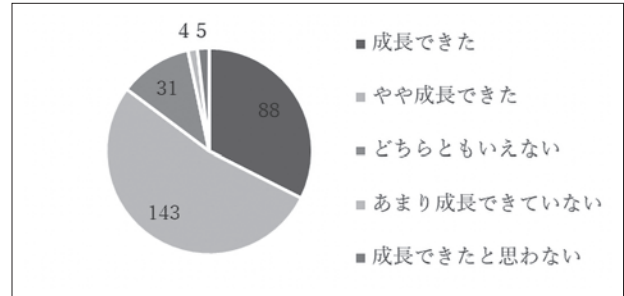


図3 学生団体に入ったことで成長につながった

最後に、今回のまちカレを構成する枠組みである、活動報告、グループディスカッション、フィールドワークについて、それぞれの満足度について質問するとともに、今回のまちカレに対する総合的な満足度と自己の成長につながったかについて質問した。

活動報告の満足度については、各団体の活動報告を動画サイトで事前に視聴したことに対する満足度と、活動報告に対する満足度について質問した。

事前視聴できたことに満足できたかとの質問に対し、「そう思う」が33.1%（90名）、「やや思う」が34.2%（93名）であり、67.3%（183名）の学生が満足できたとの結果を得られた（図4）。このことから、実行委員会が意図する代替策としての動画サイトの活用は、十分に満足できる結果であったとは言えないが、ある程度は機能したと考えられる。

また、活動報告に満足できたかとの質問に対し、「そう思う」が52.6%（143名）、「やや思う」が26.8%（73名）であり、79.4%（216名）の学生が満足できたとの結果を得られた（図5）。このことから、今回のまちカレは、新型コロナウイルス感染拡大により大きな制約を受けたことを考慮すると、満足が約80%であったことは、参加者や実行委員会にとって、評価できる結果であると言える。

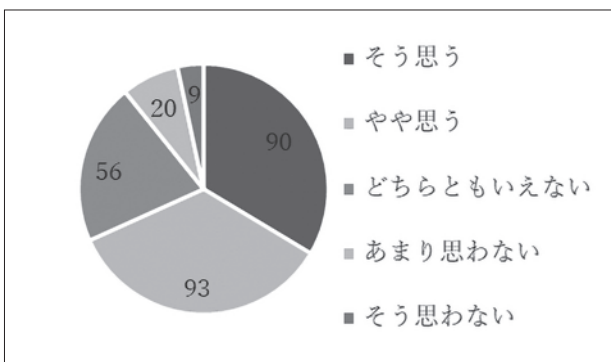


図4 活動報告の事前視聴に対する満足度

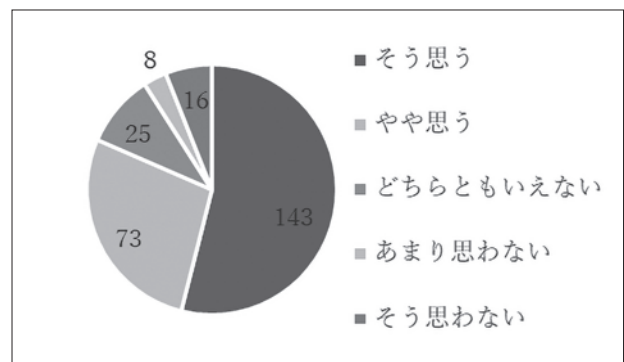


図5 活動報告に対する満足度

グループディスカッションに満足できたかとの質問に対し、「そう思う」が56.6%（154名）、「やや思う」が19.5%（53名）であり、76.1%（207名）の学生が満足できたとの結果を得られた（図6）。グループディ

スカッションについても、教室を分けてグループあたりの人数を制限したことや、ディスカッションの結果を広く共有する場を設けることができなかったことなど、大きな制約を受けたことを考慮すると、満足度が約75%であったことは、やむを得ない結果であったと評価している。

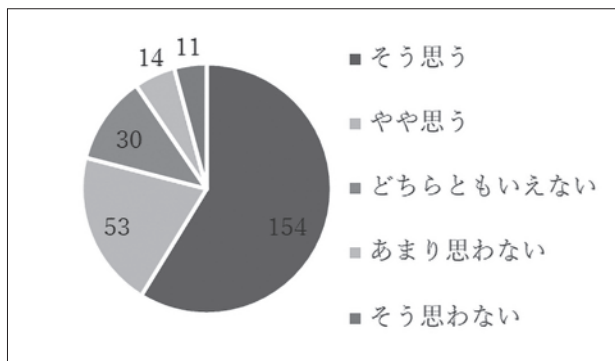


図6 グループディスカッションに対する満足度

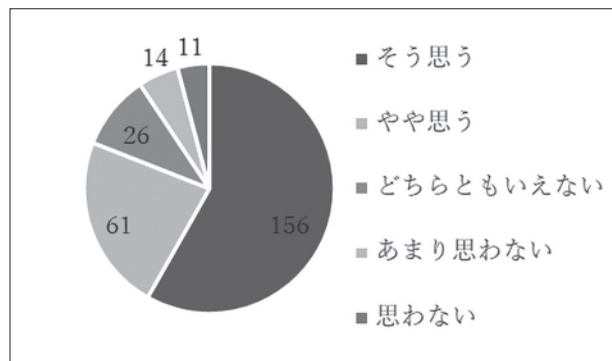


図7 フィールドワークに対する満足度

フィールドワークに満足できたかとの質問に対し、「そう思う」が57.4%（156名）、「やや思う」が22.4%（61名）であり、79.8%（217名）の学生が満足できたとの結果を得られた（図7）。参加した学生たちの大部分にとって、まちカレにおける対面でのフィールドワークは初めての経験であったことから、満足度が約80%であったことは、評価できる結果であると言える。

今回のまちカレについて総合的に満足できたかとの質問に対し、「そう思う」が65.8%（179名）、「やや思う」が21%（57名）であり、86.8%（236名）の学生が満足できたとの結果を得られた（図8）。約85%の満足度を得られていることから、実行委員会としては、評価できる結果であると言える。しかし、前回の調査では、「そう思う」が70%（152名）、「やや思う」が25%（55名）であり、95%（207名）の学生が満足できたとの結果を得られたことから、事前の予想に反して、リモート形式で開催するまちカレよりも、対面形式で開催するまちカレの方が、参加した学生たちにとっての評価がやや低い結果となった。このことは、実際にまちカレを運営するうえでやむを得なかったとは言え、今回のまちカレが制約の多い大会であったため、この点で参加者の満足度がやや低くなったことが考えられる。今後、まったく制約がないなかで大会を運営する機会があれば、再度、比較検討してみたい。

今回のまちカレについて自己の成長につながったかとの質問に対し、「そう思う」が56.6%（154名）、「やや思う」が24.6%（67名）であり、81.3%（221名）の学生が満足できたとの結果を得られた（図9）。今

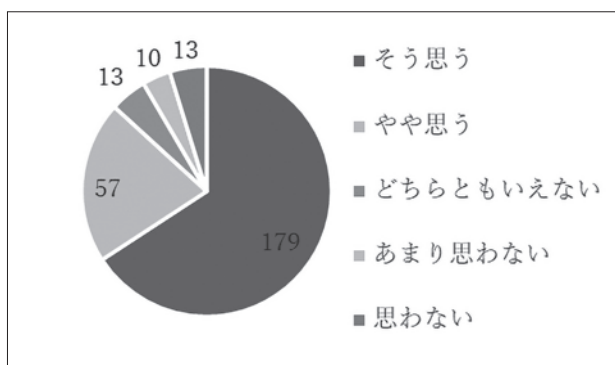


図8 まちカレに対する総合的な満足度

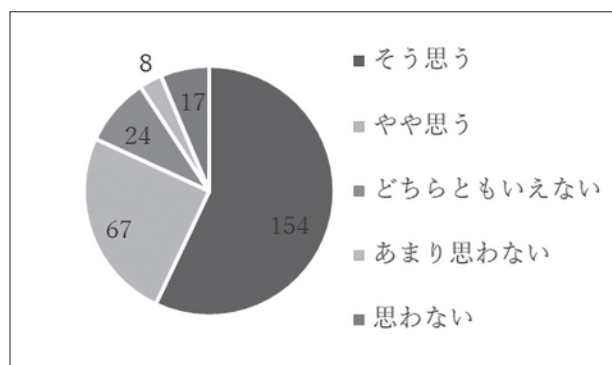


図9 自己の成長

回のまちカレに対する総合的な満足度が約85%であったことに加え、自己の成長に対する結果も約80%の参加者が自己の成長につながったと回答していることから、今回のまちカレのプログラム自体は、十分に評価されるべきであると判断している。さらに、参加した学生たちにとって、まちカレが多くの「学びの場」となっていることが改めて明らかとなった。

VI おわりに

本稿では、学生たちによる「学びの場」としての「全国まちづくりカレッジ」を取り上げ、その概要について述べるとともに、2022年に香川大学が開催校となった全国まちづくりカレッジ in 香川の詳細について述べてきた。そのなかで、新型コロナウイルスの感染拡大により大きな制約を受けながらも、当初の目標であった「まちカレの一般的なスタイルを示すこと」を達成したうえで、大規模な学生たちの「学びの場」を創出できることを示すことができた。また、2021年度ならびに2022年度のまちカレにおいて、参加者を対象に実施したアンケート調査の結果から、地域で活動している学生たちが一堂に会し、大学の枠を越えて、互いの活動について知り、活動のなかで感じている課題について語り合う「学びの場」が重要であることについても明らかにできた。さらに、参加者にとって、まちカレが「自己の成長につながる場」として機能していることも明らかにできた。

しかしながら、新型コロナウイルスの感染拡大により大きな影響を受けた2021年度ならびに2022年度の2年間のみのアンケート調査では、中長期的な視点から見た場合、まちカレが「学びの場」や「自己の成長につながる場」として機能していることを示すためには十分ではない。新型コロナウイルスの感染拡大による制約がない大会を運営する機会があれば、さらに比較検討したうえで、再び報告する機会を得たい。

最後になりましたが、新型コロナウイルスの影響が落ち着いたとは言え、全国から参加していただいた9大学22団体、計300名を越える学生や教職員のみなさまに感謝いたします。また、まちカレ実行委員長を務めた永野由さん（Bonsai☆Girls Project代表）や、副委員長を務めた市名彩乃さん（さかいで沙弥島プロジェクト代表）、大森美紀さん（直島地域活性化プロジェクト代表）、岡希美さん（KAGAWA Maker代表）、梶川瑠璃さん（Bonsai☆Girls Project副代表）、洲脇ちひろさん（Kitahama Lab副代表）をはじめとした実行委員、運営に携わった11のプロジェクトのメンバーの努力とその成果に対して、賛辞を送りたいと思います。さらに、全国まちづくりカレッジ in 香川の開催にあたり、ご後援をいただいた香川大学に感謝いたします。

参考文献

- 古川尚幸（2019）「地域と大学が連携した地域づくり～香川大学直島地域活性化プロジェクトを事例として～」『地域活性研究』10巻、127-134頁
- 古川尚幸（2020）「地域と大学が連携した地域づくり～香川大学学生ESDプロジェクト SteeePを事例として～」『地域活性学会第12回研究大会論文集』49-52頁
- 古川尚幸（2021）「地域と大学が連携した地域づくり～香川大学さかいで沙弥島プロジェクトを事例として～」『地域活性学会第13回研究大会論文集』70-73頁
- 古川尚幸（2022）「緩やかな大学間連携による学びの場の創出～全国まちづくりカレッジを事例として～」『香川大学地域連携・生涯学習センター研究報告』27巻、31-40頁

緩やかな大学間連携による学びの場の創出（2）

古川尚幸（2022）「地域と大学が連携した地域づくり～香川大学Bonsai☆Girls Projectを事例として～」『地域活性研究』17巻，67-75頁

古川尚幸（2023）「地域と大学が連携した地域づくり～香川大学たどつまちLaboを事例として～」『地域活性学会第15回研究大会論文集』302-305頁

舩井雄一（2023）「大学生の地域活性化活動が地域に与える効果の一考察：江部乙地域における取り組み事例から」『國學院大學北海道短期大学部紀要』40巻，53-71頁

水野昌夫（2004）「学生主体のまちづくり活動の教育的活用と課題－名古屋学院大学マイルポスト・プロジェクトを事例として」『都市問題』95巻，65-81頁